

当報告の内容は、それぞれの著者の著作物です。

Copyrighted materials of the authors.

「人類社会の進化史的基盤研究（3）-他者-」2012年度第4回研究会

日時：2012年12月9日（日曜日）午後1時～7時

場所：マルティメディアセミナー室（306室）

報告者：

1. 北村光二（AA研共同研究員・岡山大学）
2. 黒田末壽（AA研共同研究員・滋賀県立大学）

内容

1. 「他者=『敵』にも『友』にもなりうる存在」（北村光二）

1. サル社会における「同種他個体」とのコミュニケーション

1) 毛づくろいの（誘いかけの）コミュニケーション

・「自己」とある特定の関係を持つことになる者として不確実な存在である「他者」との関係づけの試み=「誘いかけのコミュニケーション」

・このコミュニケーションが手がかりとなって一緒に毛づくろいをするという相互行為システムが構成されるためには、「相互行為の枠組みの選択が当事者間で一致しない」という問題への対処が不可欠となる

・ニホンザルでは、この問題への対処として、他者に毛づくろいを提案するとき、それを受容する可能性が高い個体を選んでそうする - 母親と娘の間の「親しい関係」のような、「既定的な関係」にある相手を選択する

2) 敵対的衝突回避のコミュニケーション

・相互に影響を及ぼし合う可能性のある者として不確実な存在である「他者」との関係づけの試み

・無秩序の可能性が顕在化した状況で、それを回避するためには、「当事者それぞれが志向するゴールが両立しえない」という問題への対処が不可欠となる

・ニホンザルでは、この問題への対処として、相手との「優劣関係」という「既定的な関係」があることにして、その関係にもとづいて劣位者の側が「ハト派」になる

2. チンパンジー社会における「仲間」とのコミュニケーション

1) 食物分配（に先立つコミュニケーション）

・ある個体が食物を把持しているという状態で、非所有者がそれを獲得しようとして所有者に要求しながら、相手がそれを拒否してもそれに対抗せずに、あくまでも肯定的な反応を待とうとし続けるところで、所有者側も、「相手との敵対的な行為接続を回避する」とい

う相互の関係づけの枠組みを受け入れて、大げさに騒ぎ立てないようにするという対応を取るようになる（枠組みの共有）

- ・ 要求する行為であれ拒否する行為であれ、そこに作り出されつつある相互行為システムに組み込まれることになるそれぞれの行為は、非敵対的な共存状態を作り出すことを志向する行為という性格を獲得するようになることで、その相互行為システムがより安定的に再生産されるものになる

- ・ そのような相互行為における当事者たちの相互応答的な探索の後に、所有者による食物の譲渡がなされるか、それがなまに非所有者がその獲得をあきらめて立ち去るということになる

2) 対角毛づくろい

- ・ 一緒に居合わせることになりながら何もしないでいるときの不安定な状態において、誰もがそう考えるはずのこととしてある「秩序だった共存状態」を実現するために、何らかの相互行為的出来事をその場に構成することを想定する

- ・ 相互行為的出来事の構成を自分から主導してでもなく、相手に従属してでもなく、双方が同じ準備状態にあることそれ自体を根拠に実現しようとして、この「対角毛づくろい」を実行していると考えられる

3. 人間の社会における「他者」とのコミュニケーション

1) 「情報」の「伝達」としての発話によるコミュニケーション

- ・ 「自己」とある特定の関係を持つことになる者として不確実な存在である「他者」との関係づけの試み＝「会話」

- ・ 「会話」は、基本的にどんな相手（不確実な他者）とも実行可能である - 他者との関係の複合化・分化に向けた共有されるコンテキストの拡充

2) 禁止の規則に従うことによる「安定的な共存状態」の実現

- ・ 規則は、基本的にあらゆるメンバー（不確実な他者）に適用される

- ・ 「ある個人の所有するものは、所有者の同意なしに獲得・消費してはならない」という禁止の規則に従うことによって安定的な共存が維持されているところで、所有者からそのものが積極的に分与されることによって、その後、両者の間には、「友人・縁者」どうしという関係（贈り物をし合う関係）が成立したと見なされることになる

3) 儀礼の規則に従うことによる「無秩序の解消＝秩序の回復」の実現

- ・ 何らかの要因によってある特定の無秩序がもたらされたと考えられるところで、儀礼の規則が指定するある特定の相互行為的出来事をその場に作り出すことによって、「問題となる無秩序の解消＝秩序の回復」という期待される結果を実現しようとする - それによって、少なくとも、それを「自分たちのやり方」だと考えている人々の間に、安定的な共存の秩序が回復されることになる

2. 「霊長類の集団へのアイデンティティ」(黒田末壽)

1 霊長類学からの他者をアイデンティティから考える

霊長類社会学の分野で「他者」という概念が論じられたことは、いままでにない。他者概念を導入するには、自己とか自我の概念をどこまで適用できるか曖昧さが残る霊長類に、その意味があるのかという根本的問題があるが、まずは、他者=ある個体にとってそのあり方に影響を与え、何らかの変化をもたらしつつけるような存在(他個体)としておこう。この定義では、たとえば、チンパンジーやボノボならば、アルファ雄に挑戦する若い雄の出現は、おとな雄たちにとって、それまで従順だった個体が突然手強いライバルに豹変する現象で、彼に対する態度や振るまいが変化し、同時におとな雄仲間の関係を確認することが生じる。だから、若い雄は他者として登場することになる。また、他集団から発情した雌がくれば、彼女と新しい関係を築くことになるから、集団の全員にとって彼女は他者である。母親が新生児をもてば、それへの対応が生じただけでなく他の個体との交渉パターンも変えるが、それが自己のふるまいを意識して変えているなら、新生児は母親にとって他者であると言える。

だが、他者という言葉で、これらのことがらになにか新しい理解が得られるかどうか、私にはまだわからない。そこで、他者の代わりに、他者との関係で形成されるアイデンティティについて検討する中で、他者概念適用の創造性があぶり出てくるか、どうかを考えてみる。

2 霊長類社会学におけるアイデンティティ

人間では自己アイデンティティが中心概念になるが、霊長類社会学ではそれは困難な思考対象で、アイデンティティが議論されたのは、今西による「アイデンティフィケーション仮説」と伊谷による集団への帰属意識(社会的アイデンティティ)である。

今西のアイデンティフィケーション仮説は、ニホンザルの雄の子どもがリーダー雄にアイデンティファイして群れ本位の行動を身につけるというもので、それは刷り込みのようなメカニズムであるが、後天的社会的に獲得される行動型であるから文化の1種である。しかし、今西はこのとき、ニホンザルの雄が出自集団を出ることをまだ認識していなかった。伊谷はこのことを指摘して、今西のアイデンティフィケーション仮説は単純すぎると批判し、母系型社会集団をもつニホンザルではなく、父系型社会集団のチンパンジーで考えるべきとして修正している。チンパンジーでは、アルファ雄にアイデンティファイしたかのように振る舞った子どもがやがて見習ったアルファ雄に挑戦してトップに立った例が報告されている(グドール)。伊谷は、子殺しをしカニバリズムをおこなう雄たちに子どもの雄がアイデンティファイして、暴力性を身につけ、集団内では子殺し、集団間では闘争集団となる可能性を論じた。

集団への帰属意識は、伊谷がニホンザルの若い雄のふるまいで論じている。隣接集団に移籍した雄たちが、手のひらを返したかのように、出自集団と対決する前線に出て吠えつき攻撃する現象を、集団へのアイデンティティの転換と形容した。

これらのアイデンティティの議論から、他者をあぶり出すには単純な論理ではうまくいくようには見えない。アイデンティティ形成がオートノミーのように見えるからである。これを越えるには、より詳細な検討と、アイデンティティの別の側面を調べる必要がある。